

須恵器の叩き目

横山, 浩一

<https://doi.org/10.15017/2231028>

出版情報 : 史淵. 117, pp.127-155, 1980-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

須恵器の叩き目

横山浩一

目次

はじめに

一 叩き締め^の道具

二 叩き目のグループ分け

三 胴部側面の叩き目

四 胴部底面の叩き目

五 胴部側面の叩き目と底面の叩き目の重複関係

おわりに

はじめに

叩き目とは、土器や土製品を作る際、器壁を叩き締めることによって生じた道具の圧痕をいう。この論文は須恵器の器面に叩かれた叩き目を、製作過程と関係づけながらどのように判読すべきかを論じたものである。

須恵器の叩き目ないし叩き技法についてはすでにいくつかの研究があるが、取り扱われるテーマは主として叩き目文様の変遷と、叩き目を消去する手法の消長に限られていた。叩き目の器面における方向や、叩き目の重複関係な

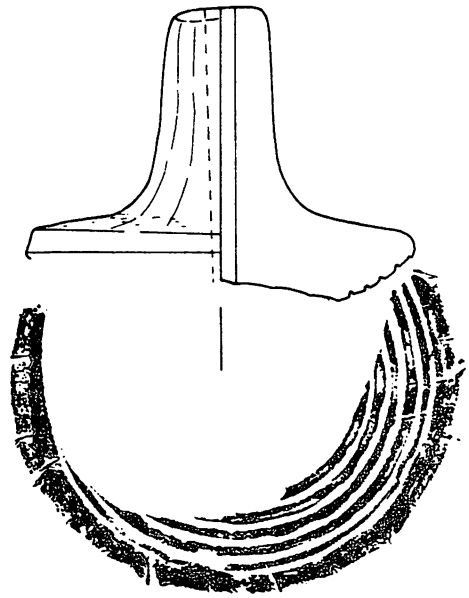
ど、器面における叩き目のあり方を正面から取り上げた研究は見られない。このような研究の現状を考慮して、本稿では叩き目文の変遷など、すでに取り上げられている課題には深入りせず、もっぱら、叩き目の器面におけるあり方を法則的に把握することに力を注いだ。叩き目を言語になぞらえるならば、本稿は、叩き目文様という「語彙」を論じたものではなく、叩き目の「文法」を発見することを旨としたものである。

このような研究は瓦などについてすでにおこなわれているものの、⁽²⁾須恵器については今回が最初の試みであるので、細部にこだわらず、大筋を把握することに努めた。そのため、検討の資料を丸底の壺甕類で、しかも、平行線叩き目を印するものに限った。この種の器形は器面に叩き目を残すことが最も多く、また、平行線叩き目は器面における方向や重複関係を最も読み取りやすいからである。主として取り扱う時代は、古墳時代から平安時代前期までとした。理想をいえば、それ以降の須恵器系の焼物をも視野に入れて論を展開すべきであろうが、現在の筆者には新しい時代の資料を消化する余裕がないので、右のように時代を限ったわけである。

一 叩き締め の 道具

土器の製作に際しておこなう器壁の叩き締めには、二つの効果があるとされている。第一は器壁の調整である。叩き締めによって、粘土と粘土のつなぎ目の接着がよくなり、粘土中の気泡が追い出され、器壁の厚みは平均化される。第二は器形の調整である。叩き締めによって器壁が薄く延ばされると、土器の表面積がひろがり、土器の形にも変化が生じるので、叩き方を適当に加減すれば、土器を意図する形に近づけることが可能である。のちにもふれるように、叩き締め作業によって、土器をもとの形と似ても似つかぬものに変えてしまうこともある。

須恵器の叩き技法は、基本的には弥生式土器のそれと似ている。叩き締めの作業に先立って、粘土帯積み上げなどの技法により土器のおよその形を作る。この、いわゆる第一次成形を終った粗型に対し叩き締めをおこなうわけであ

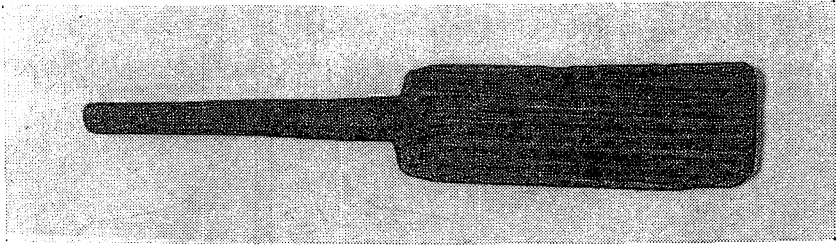


第1図 須恵器用の土製当て具 約 2/5
岐阜・老洞1号窯（岐阜市教委概報より）

るが、大型の器を作る場合は、一気に全体の第一次成形をおこなうと、粘土の自重で形がくずれるおそれがあるので、第一次成形を途中で休止して叩き締めをおこない、粘土が若干乾燥するのを待って、第一次成形と叩き締めに再開する。このことは、第一次成形の休止部に生じやすい剝離面、いわゆる擬口縁に叩き目を印するものがあることによって確認できる。

叩き締めは、片手に持った当て具を土器の内面に当てがい、他方の手に持った叩き具で土器の外側を叩くことによっておこなう。したがって、須恵器の叩き締め作業には、土器の内側で使う当て具と、外側で使う叩き具との、少なくとも二つの道具を必要とする。叩き締めの道具には粘土に接する面に縄を巻いたり、彫刻を施すことが多い。このような面に凹凸のある道具を使うと、土器の面には道具の凹凸に忠じた圧痕、すなわち叩き目がつく。

叩き目は装飾的な効果をもつが、人目にふれない土器の内面にも叩き目をつけ、また、一たんつけた叩き目をのちの工程ですり消すこともあるので、装飾的效果だけをねらって面に凹凸のある道具を使うのではないことは明らかである。叩き締め道具の面に凹凸をつけることについてはこれまで一般に、道具を粘土からはがれやすくするための工作であると説明されてきた。しかし、古唐津の叩き技法を伝承する金子認氏によると、道具を粘土からはがれやすく



第2図 弥生式土器用の叩き板 大阪・東奈良（同遺跡調査会保管）

するには、道具に水を含ませておけばよいのであって、凹凸をつけるのは、土器を叩いた際に表面の粘土が横に逃げるのを防ぎ、叩き締め（⁴）の効果を高めるための工作であるという。

須恵器の叩き締め道具のうち当て具の実物としては、以前から土製品の存在が知られていた。その形状には二種あり、一つは、円盤の一面に棒状の把手をつけた茸形のもの（第1図）、もう一つは平面が小判形で、把手がなく、浴用の石鹼に近い形をしたものである。いずれも同心円を刻する。しかし、土製の当て具は現在のところ岐阜県下からしか発見されていない。むしろ、須恵器の内面叩き目に木目の痕跡があらわれていることがあるので、木製の当て具が広く使用されていたのではないかと考えられていた。果して最近、愛媛県窪田遺跡で木製の茸形当て具が発見され、従来の推定が裏付けられることになった。これは針葉樹の心持材製で、表面の同心円文は木口の年輪ぞいに春材部を彫りくぼめたものである。同心円文について須恵器の内面叩き目によくあらわれる平行線文の原体についてはまだよくわからない。

須恵器の叩き具は、大阪府東奈良遺跡出土の弥生式土器の製作に使われた叩き板（第2図）や民俗例から類推して、羽子板状の木製叩き板が想定されていたが、その実物と見られるものが、やはり窪田遺跡から発見されている。これは表面に刻みがないが、使用によって表面が磨滅し、木目が浮き出している。

叩き板については、板の木目と刻み目の関係に注意しなければならない。このことを最初に的確に指摘したのは佐原眞氏である。同氏の考えを基礎に置きながら須恵器の

場合を具体的に検討してみよう。叩き板はくり返し使用すると、磨滅して表面に木目に応じた凹凸を生じる。叩き作業の際にこの凹凸は、叩き板に人工的に刻まれた凹凸とともに土器面に転写されるので、叩き目を観察すれば、刻み目と木目との方向関係を知ることができる。叩き目から推定すると、平行線を刻んだ叩き板には、刻みが木目と交差するものと、平行するものがある。交差するものは大部分が直交するが、斜交するものもわずかにある。

木目と交差する平行線叩き目には木目の痕跡があらわれやすい。肉眼ではそれと認め難いものでも、強い斜光線の下で拡大鏡を使えば、たいていの場合、叩き目の凹部に、刻み目の圧痕と交差して走る木目の圧痕を認めることができる(図版第一一・2)。刻み目の圧痕と交差して木目の圧痕が明瞭に見える平行線叩き目は、一見、格子状叩き目のように見えるが(図版第一三・4)、すでに指摘されているように、これは擬格子状叩き目とも称すべきもので、格子目を刻んだ叩き板から生じる真正の格子状叩き目とは区別しなければならぬ。

木目平行の平行線叩き目にも、刻み目と平行して走る木目の圧痕が認められる。図版第一一・5はその例である。ただし、木目交差刻みの平行線叩き目にくらべると木目の痕跡はあらわれにくい。刻みの圧痕に交差する木目の圧痕が見えないという消極的証拠と、器面における叩き目の方向という状況証拠にもとづいて、木目平行刻みの平行線叩き目であると判定せざるを得ない場合が多い。木目平行刻みの平行線叩き目に木目の圧痕が少ないことについては、東奈良出土の弥生時代の叩き板のように針葉樹の極端な板目材を用いたためか、あるいは、針葉樹材の春材部を彫り凹めることによって木目と一致した刻みをつけているためか、さらにあるいは、もともと叩き板には刻みがなく、人工的な刻みの圧痕のように見えるものが、実は板の磨滅によって浮き出した木目の圧痕であるのか、三通りの説明が考えられる。なお、格子状叩き目にも木目の圧痕があらわれることは少ないが、全く認められないわけではない。図版第一一・6はその例である。

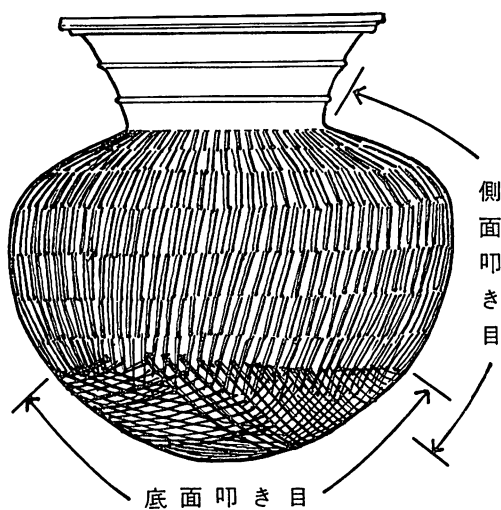
念のため記しておく、叩き板が一木作りであれば、叩き目にあらわれた木目の方向と柄の方向は一致するが、柄

が別木作りであれば、両者の方向が一致しないこともあり得る。須恵器の場合は柄を別木作りにしなければならぬ特別な理由を見出せないで、一応、日本や朝鮮で現に用いられている叩き板と同じように、一木作りであったとして以後の論をすすめることとする。

二 叩き目のグループ分け

一回の叩き締め動作によって器面に生じる叩き目は小さなものである。この小さな叩き目が無数に集って、器面を覆っているわけである。叩き板の幅を復原したり、叩き締め作業の進行順序を詳細に追跡しようとすれば、複雑に相接し相重なり合う叩き目のなから個個の叩き痕を識別しなければならぬ。叩き目の観察は、最終的には、そこまで徹底しておこなうべきであろう。しかし、研究の最初の段階から、器面を覆う叩き目を個個の叩き痕単位に分解してしまうことは、労多くして功少ないばかりか、細部に拘泥して大局を見失うおそれがある。研究の手順としては、まず、器面に印された叩き目をいくつかのグループに大別し、それぞれのグループの特性や、グループ相互の関係を明らかにして大局を把握し、しかるのち個個の叩き痕単位の観察に進んだ方が得策であると考え。本稿での報告が、おおむね叩き目のグループ単位の考察にとどまっているのは、研究の現段階において、そのような作業がまず必要であると考えたからにはかならない。

一個の須恵器に印された叩き目をおおまかにグループ分けしようとする場合、壺・甕であれば、まず、口頸部の叩き目と、胴部の叩き目に分つのが適當である。須恵器の壺甕は、口頸部がなで仕上げであることが多く、また、しばしばこの部分に文様が付される。そのため、口頸部の最終仕上げ面に叩き目が残っていることは少ないが、仕上げのゆきとどかなかつた部分に叩き目が残っていることがあるので、やはり口頸部にも叩き締めがおこなわれたことがわかるのである。割れ口の形状等から判断すると、須恵器の壺甕では口頸部と胴部とを別別に成形し、のちに接合する手



第3図 胴部叩き目のグループ分け模式図

法が広汎におこなわれている。このような手法でつくられた土器では、当然、口頸部の叩き締めと、胴部の叩き締めとが別個の作業としておこなわれたであろうから、両部の叩き目を別別のグループに分けることは十分に理由のあることである。もっとも、須恵器の系譜をひく土器のなかでも時代の降るもので、口頸部と胴部の境界が明瞭な稜をなさない器形では、口頸部と胴部を別作りとせず、二つの部分の叩き締めを一連の作業としておこなったものがある。たとえば、福岡県池の上遺跡で蔵骨器に使われていた須恵系の壺は、胴部から口頸部にまたがって内面叩き目が連続している。また、兵庫県のみ石で作られた平安末期の魚住焼では、外面の地下叩き目が胴部から口頸部に連続している。このような場合には、胴部から口頸部にわたる叩き目を一連のものとしてとらえねばならないことはいうまでもない。

口頸部の叩き目がのちの工程で消し去られるのを原則とするのに対し、胴部の叩き目は最終仕上面に残されることが多い。胴部の叩き目は、側面の叩き目と、底面の叩き目の二つに分けて取り扱うのが適當である。須恵器を見なれた研究者はすでに気付かれていることと思うが、丸底の壺甕の胴部に叩かれた叩き目は、胴の上部と下部でいちじるしく様子を異にしている。それぞれを胴部側面叩き目、胴部底面叩き目とよび分けて記述することにしよう(第3図)。側面叩き目は比較的方向がそろっており、製作者がある程度、装飾的效果を意識していたことが読み取れる。これに対し底面叩き目は、方向がそろわず、乱雑な外観を呈する。また、側面と底面とで叩き目文様を異にすることも少なくない。側面叩

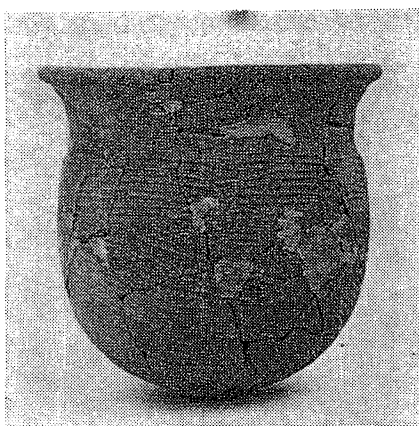
き目と底面叩き目はこのようにはっきりと違っているので、実物について両者を見分けることは容易である。しかし、側面と底面の叩き目が施される範囲は一線を画して明瞭に分れるのではなく、両者はかなりの範囲にわたって重なり合っている。壺や中・小型の甕では、側面叩き目の下限は不明瞭であるが、底面叩き目の上限は明瞭であって、底から測って胴の高さの四分の一ないし三分の一あたりにあることが多い。ただし、時代の降る土器で胴部最大径の部分がいちじるしく上方にかたよっているものでは、底面叩き目の上限が高い位置を占める傾向があり、胴の高さの四分の三ぐらいのところまで達することがある。このような場合、底面叩き目という言葉を用いるのはいささか躊躇されるが、底面よりひきつづいて施された叩き目であるのでやはりこの語を用いておく。

胴部の叩き目が側面と底面のグループに分れるのは、外面のみならず、内面についても当てはまることである。内面に一種類の当て具しか用いない土器では、内側面叩き目と内底面叩き目の区別をつけ難いこともあるが、当て具を変えている場合には両者を容易に判別できる。内外の底面叩き目の上限が誤認の余地がないほど明瞭な土器について検してみると、内底面叩き目の上限は、外底面のその裏側に正しく位置していることがわかる（図版第一一七）。これは、叩き目が内外呼応してつけられることからくる当然の結果である。

口頸部の叩き目についてはまだ観察例が少ないので、本章で記した以上に詳述すべきことを持ちあわせないが、胴部の叩き目についてはなお論ずべきことが多いので、次に章を分けて側面と底面の叩き目それぞれについて詳述する。

三 胴部の側面叩き目

胴部側面叩き目のあり方を法則的に理解する端緒を得るため、叩き目文のなかでも最も単純な平行線叩き目を取り上げ、その器面における方向を検討してみよう。外側面に印された平行線叩き目は、正縦位ないし縦位よりの斜位を



第4図 土師器 福岡・沖ノ島
(宗像大社)

とるもの(図版第二一)と、正横位ないし横位よりの斜位をとるもの(図版第二二)とに大別できる。前者を縦位平行線叩き目、後者を横位平行線叩き目と総称しておこう。縦位平行線叩き目は古墳時代から平安時代にわたって広くおこなわれるが、特に古い時代に多く、古墳時代の平行線叩き目はほとんどこの類に属する。これに対し、横位平行線叩き目は新しい時代に盛行するもので、その存在が目立ち始めるのは古墳時代終末期以降である。⁽¹³⁾

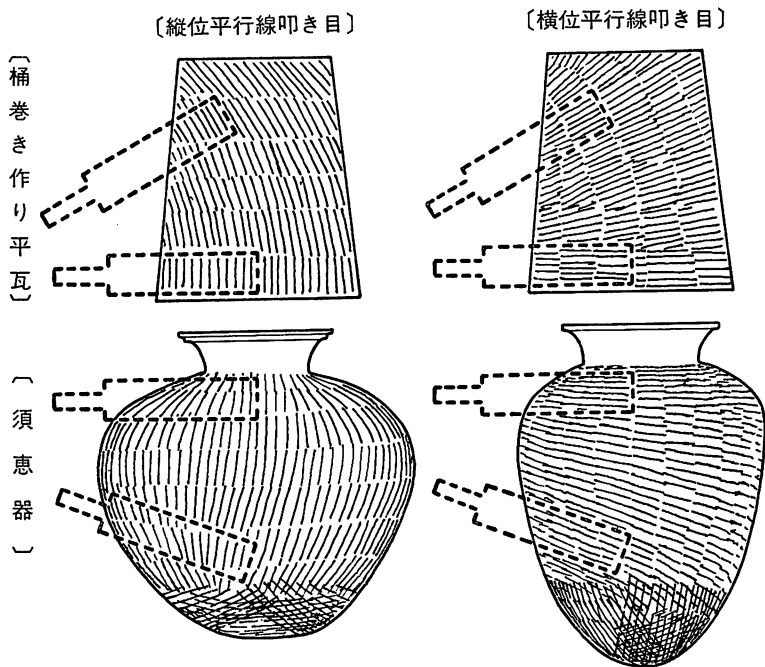
兩種の平行線叩き目について木目の痕跡を検してみると、原則として縦位平行線叩き目は木目直交刻みの叩き板を、横位平行線叩き目は木目平行刻みの叩き板を使用しており、例外的に、横位平行線叩き目に木目直交刻みの叩き板を使用したらしいものがある。すなわち、外側面の叩き締めは、叩き板を土器に対し横位にかまえておこなうのが原則であって、例外的に、縦位にかまえることもあったということになる。

例外的と見なした木目直交刻みの横位平行線叩き目は、福岡県沖ノ島祭祀遺跡の須恵器等に疑わしいものが若干見られるだけで、実例は非常に少ない。⁽¹³⁾むしろ新しい時代の土師器に見ることの方が多い。弥生式土器、古式土師器の平行線叩き目はすべて木目平行刻みであるが、古墳時代終末期以降、奈良平安時代の土師器には、須恵器と同様な木目直交刻みの叩き板を使ったものがあり、そのなかに叩き板を土器に対し横位に使用したものとならんで、縦位に使用したのを見かける。実例は沖ノ島祭祀遺跡ほか北部九州の遺跡出土品にある⁽¹⁴⁾。叩き板を縦位にかまえるのは、轆轤上に正立させた土器の側面を叩くのにはふさわしくない使い方である。轆轤を使わない土師器の方に、叩き板を縦位に使った例がより多く認められるのは、むしろ当然のことであろう。なお、須恵器の胴部側面に、木目平

行刻みの叩き板を縦位に使用した例には、いまだ接したことがない。

須恵器に一般的な、叩き板を横位に使用した平行線叩き目を見ると、外側面の叩き目全体が正縦位あるいは正横位をとることは少ない。多かれ少なかれ、叩き目が傾きをもち、しかも、部分によって傾きを異にするのが普通である。最もよく見かけるのは、縦位平行線叩き目の場合、胴の下部では右上りの斜位ないし斜め縦位であるが、上方にゆくにしたがって傾きが少なくなり、頸部直下では正縦位になるというタイプである（図版第二一）。横位平行線叩き目の場合、胴の下部では左上りの斜位ないし斜め横位をとるが、上方にゆくにしたがって傾きが少なくなり、頸部直下では正横位となるものが最も多い（図版第二二）。いずれの場合も、正立した土器を右手に持った叩き板で叩いたとすると、胴の下部を叩く際には板を斜め下方に向け、叩きが上部に及ぶにしたがい、板の方向を水平に近づけていったと読み取ることができる（第5図下段）。これが最もよく見かけるタイプであるが、このほか、叩き目から推定される叩き板の方向が、下より、斜め下方↓水平↓斜め上方と変るもの、水平↓斜め上方と変化するものも多少認められる。以上すべての場合に共通していることは、叩き板の動きが柄の方に要を置いた扇形の軌跡をえがいていることである。このような叩き板の動き方は、工人が姿勢や腕の位置をなるべく動かさないうで、しかも、できるだけ広い範囲を叩こうとする際、自然に生じてくる動き方であって、佐原眞氏が桶巻き造りの平瓦について、「叩き締め15の円弧」という言葉で表現している叩き板の動きと全く同じ性質のものである（第5図）。

瓦の場合がそうであるように、須恵器の外側面叩き目にもすべて「叩き締め15の円弧」が認められるというわけではない。特に、小型の甕や壺では「円弧」のあらわれ方が微弱である。「円弧」が最も明瞭にあらわれるのは器高が四〇センチ台の中型の甕である。中型の甕の叩き目をよく観察してのち小型の甕や壺の叩き目を見ると、「円弧」の部分が器面にあらわれているかを読み取れるようになる。いかなる理由によるのか明らかではないが、器高が数十センチに達する大型の甕では、かえって「叩き締め15の円弧」のあらわれ方は不明瞭である。



第5図 瓦と須恵器にあらわれた「叩き締め円弧」模式図

須恵器の「叩き締め円弧」と瓦のそれとが相違する点は、瓦では下より、水平↓斜め上方と進行するのに対し、須恵器では斜め下方↓水平という動きを見せる例が圧倒的に多いことである。この違いが生じたのは、製作中の土器が工人の体に対して瓦よりも低い位置に置かれていたためであると解される。¹³⁾

外側面の叩き目の最下部には、時に、直上の叩き目とは方向を異にする正縦位もしくは正横位に近い叩き目を見ることがある。これは「叩き締め円弧」の法則だけでは理解できない現象であるが、胴の外側面の下端は、叩き板を斜め下方に向けて叩くと叩き残りの部分が生じやすいので、工人が特に姿勢を低くして、叩き板を水平方向に向けながら叩きをおこない、以後は自然な姿勢に復して、「叩き締め円弧」の法則にしたがう叩き板の動かし方をしたと考えれば説明がつく。

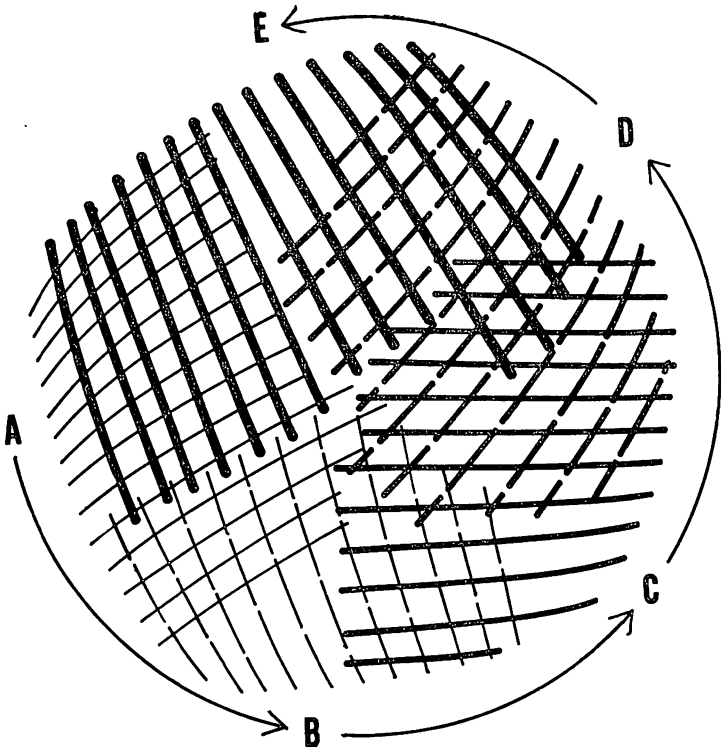
須恵器壺甕のほとんどは「叩き締め円弧」

の中心を土器の向って左側に持つ。これは右利きの工人によって製作されたとすれば当然のことである。少数ながら見られるところの、「円弧」の中心を向って右側に持つ土器は、一応、左利きの工人の作と考えられるが、これを断定するには、出現頻度の吟味等の手続が必要であろう。「叩き締め円弧」を示さないで、側面の平行線叩き目全体が正縦位あるいは正横位をとるものは、叩き目の方向をそろえることについて、工人が特別の配慮をしたものと考えられる。また、「叩き締め円弧」を示すものでも、叩き目が全体として整然とした流れをえがくものは、工人が自然の手の動きにまかせて叩いたのではなく、やはり、叩き板の方向をコントロールすることに意識的な努力をほらったのであろう。

以上述べたように、瓦についていわれている「叩き締め円弧」の法則を援用すれば、須恵器の外側面における叩き目の方向の変化を合理的に理解できるのであるが、これは平行線叩き目に限らず、それ以外の文様から成る叩き目についても当てはまることである。くわしくは述べないが、図版第二―三に示すように、格子状文から成る外側面叩き目にも「叩き締め円弧」が明瞭にあらわれている。

なお、今後観察を進める際に留意すべき点として、側面二重叩きの問題がある。平安末期と推定される魚住焼の甕では、側面にまず下地叩きを施し、さらにその上から方向の違う仕上げ叩き目を施す手法が見られる。このような手法がいつにはじまるかは明らかでないが、古墳時代終末期以降、奈良時代の甕類にも二重叩きの形迹をとどめるものが少数ながら見られる。それ以前の時代のものには、まだ明確な二重叩きの実例を知らないが、今後もその有無については注意をはらいたい。

外側面の叩き目については、叩きの進行方向や、全面につけた叩き目の上にさらに部分的に叩き目を付加する手法など、追求すべき点が多く残されているが、このような一叩き痕単位の観察を必要とする問題については、今回は一切ふれないことにしておく。



第6図 底面叩き目模式図 矢印は叩きの進行順序を示す

四 胴部底面の叩き目

外底面の叩き目は、従来の発掘報告書等に「自由な方向をとる」とか「乱打している」とかいう言葉で表現されているように、方向がまちまちで、乱雑無秩序なものとなされてきた。しかし、くわしく観察してみると、底面の叩き目も決して手あたり次第につけられたのではなく、一定の手順に従って施されていることがわかる。

そもそも外底面の叩き目が乱雑に見えるのは、互いに方向を異にする叩き目の群が複雑に重なり合っているためである。方向を同じくする叩き目ごとを一括してゆくと、全体をいくつかの群に分解することができる。もっとも、先に叩かれた叩き目がのちの叩き目によって消されることもあるので、

それぞれの叩き目群の本来の範囲を正確につきとめることは難しいが、およその範囲を推定することは可能である。たとえば図版第三にかかげた外底面の叩き目は、のちに部分的に加えられた叩き目を無視すると、第6図のように五群に分解できる。

叩き目群の布置は幾何学的に整正であるとはいえないが、全く秩序がないわけではない。最もよく遭遇するタイプは第6図のように、底面の中央を中心とし、周囲を放射状に近い形で何区画かに分けて叩いているものである。隣り合う叩き目の群は互いに大幅に重なり合っているので、たいていの部分は二回以上、違った方向からの叩き締めを受けている。底面の中央部を第6図のように叩き、さらにその周囲を何区画かに分けて叩くものも見受けられる。多くの例について意識的な観察を進めれば、いくつかの類型を区別できるのではないかと考えているが、筆者の研究はまだそこまで到達していない。

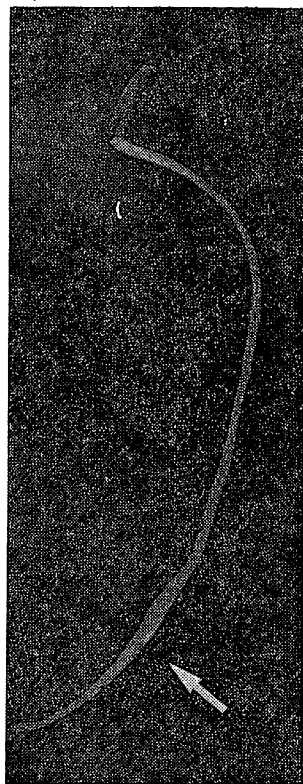
以上のような底面叩き目のあり方は、底の叩き締めをおこなうに当って、工人が土器を小刻みに回転しなかったことを示している。大型品は別として、底の叩き締めを受ける土器は工人の膝と片腕で支えられたのであろうが、工人は自分の体と土器との位置関係を一たん定めると、それをなるべく動かさずに作業を進めようとしたらしい。一たん定めた位置で叩きやすい部分を叩き尽くし、それ以上叩き締めを続けるには土器の位置を動かさざるを得ない状態にたちいたった時、はじめて土器を多少回転し、すでに一度叩いた部分からまだ叩いていない部分にまたがって叩き締めを続行する。このような動作をくり返して、底面の叩き締めをおこなったと考えられる。叩き締めの進行方向についてはまだ十分な観察をおこなっていないが、図版第三の土器は第6図に矢印で示したように、底面から見て逆時計廻りに叩き締めが進行している。

五 胴部側面の叩き目と底面の叩き目の重複関係

壺甕類の胴に見られる側面叩き目と底面叩き目は、製作の途上でいずれが先に叩かれたのであろうか。須恵器の叩き目について意識的な観察をはじめる以前、筆者は漠然と、叩き締め作業は土器の下部から上部に及ぶものと想像していた。ところが、実物の叩き目の示す重複関係は、必ずしもそのような想像とは合致しないのである。胴の側面叩き目と底面叩き目が重複している部分について検すると、壺や中型・小型の甕では、側面叩き目が底面叩き目によっておしつぶされておき（図版第四—1—上より三段目）、側面の叩き締めが底面の叩き締めに行先していることがわかる。これについては、いまだ例外に遭遇したことがない。当然のことながら、この先後関係は外面の叩き目ばかりでなく、内面の叩き目についても当てはまる。

叩き目の先後関係は、叩き目と表面調整痕との先後関係をもあわせ考えることによって一層明らかとなる。壺や中型の甕では、叩き目の上に刷毛目調整やなど[・]の表面調整を施す場合、側面の叩き締めにひきつづいて側面の表面調整をおこなない、底面の叩き締めはあとまわしにするのが一般的な手順である。いいかえれば、側面と底面の叩き締め作業の間に、側面の表面調整の工程をはさみこんでいる。実例は枚挙にいとまがない。図版第四—2に示したのはその一例であって、側面叩き目の上につけた刷毛目を底面叩き目がおしつぶしている。いわば、刷毛目という一種の「間層」によって、側面と底面の叩き目の先後関係が明示されているわけである。この例では底面は叩き放しであるが、底面にも刷毛目調整などをおこないたい場合は、側面の表面調整とは別個に、底面の叩き締め終了後、底面の表面調整をおこなう。図版第四—3はその実例である。この土器では、側面叩き目の上を走る刷毛目を底面叩き目がおしつぶし、さらにその底面叩き目の上を別の刷毛目が走っている。

胴の側面の叩き締めが先行し、底面の叩き締めがあとまわしにされるという事実は、一見不思議なことのようにあがるが、轆轤の盤上で成形された土器の平らな底を、のちの工程で丸底に叩き上げたと考えれば説明はつく。推定される工程をい少し詳しく述べると、まず、胴部の第一次成形は、轆轤を回転台として利用しながら、粘土帯積み上げ



第7図 須恵器壺の断面
平城宮（奈文研保管）矢印は第1
次成形時の側面と底面の境目と推
定される個所を示す

しながら、側面叩き目の上に刷毛目調整あるいはなでを施す。このようにして、轆轤上でおこなった方が都合のよい作業をすませたのち、土器を轆轤から取りはずし、底面の叩き締めをおこなう。その際、最初平底に作られていた底部は、叩き締めによって薄く延ばされるので、底面が外に張り出して、丸底となるのである。そして、さらに必要があれば、土器を轆轤の盤上に倒立させ、轆轤の回転力を利用してながら底部の表面調整をおこなったと考えられる。

須恵器を観察し慣れた研究者はすでに気付いておられることと思うが、丸底を持つ須恵器の壺甕の断面を見ると、底近くをめぐって器壁がやや厚い部分があり、それより下方ではまた急に厚みが減って、底は薄く仕上げられているのが普通である（第7図）。筆者は、この底近くで器壁がやや厚くなっている部分が、轆轤上でおこなわれた第一次成形の際、胴部の側面の下端であった個所に当るのであろうと考えている。

胴部側面の叩き締め作業が底面の叩き締め作業に先行しているということは、当然、底面の叩き締めにとりかかる以前に、胴部全体の第一次成形が終っていたことを意味する。したがって、底面の叩き締めは、胴部上端の開口部から当て具を握った手をさし入れておこなわなければならない。土器がさほど大きくない場合は問題ないが、胴の高さ

の技法によっておこなわれる。轆轤の盤上で成形されるから、底は当然、平底となるわけである。つぎに、やはり轆轤を回転台として利用しながら側面の叩き締めをおこない、さらに要すれば、轆轤の回転力を利用

がある限度を越えると、胴上端の開口部から手をさし入れたのでは、当て具を底面にとどかせることが不可能になる。須恵器の甕のなかには、明らかにそのような限度を越えた大きさのものがあるので、そのような大型品でも、果して胴部側面の叩き締めが底面のそれに先行しているか否かを点検する必要がある。器高數十センチ以上の大甕は、古墳の墳丘部からの出土例がしだいに増えつつあるが、それ等を適切な方向に回転し、適切な光線状態で観察する機会に恵まれることは必ずしも容易ではない。そのため、今日までに、上記のような観点から筆者が実査し得た大甕の数はごくわずかである。そのなかでも、叩き目の残り方が良好で、重複関係を確認できたのは、福岡県小田茶臼山古墳出土品(図版第五)等の数例である。これ等の大甕では、底面の叩き目が側面の叩き目に先行してつけられていること、すなわち、中・小の甕とは逆に底面の叩き締めを終わってから側面の叩き締めをおこなっていることが認められた(図版第五下)。利用できた資料はごくわずかであるが、胴部底面の叩き締めが側面のそれに先行することは理論的にも当然のことであるので、大型甕に共通する一般的原则と見てよかろう。おそらく、大型甕の場合は轆轤を使わず、最初から底を丸底とし、粘土乾燥のための適当な休止をはさみながら、粘土帯積み上げと叩き締めの作業を交互にくり返して、成形をおこなったと考えられる。

中・小型の甕と大型の甕とで胴部の叩き締めの手順が反対になっているとすると、具体的に、どのくらいの大きさの土器を境として手順の逆転がおこっているだろうか。この点については、まだはっきりとした境界線を指摘できるだけのデータを持ち合せていない。ただ、胴高四五センチ前後の土器で側面叩き締めが底面叩き締め⁽²⁾に先行するものかなりあり、一方、佐賀県藤付三号墳出土の甕は胴高四五センチであるが、底面叩き締めが側面叩き締め⁽²⁾に先行するので、およそこの程度の大きさを境界として手順が逆転するのではないかと予測している。しかしながら、胴高四五センチの甕では上膊まで土器の中にさし入れないと、手に握った当て具を内底面にとどかせることはできない。そこまで深く手を土器の中にさし入れると、叩き板で叩いている局部を工人が直接、眼で見ることができなくなる。それ

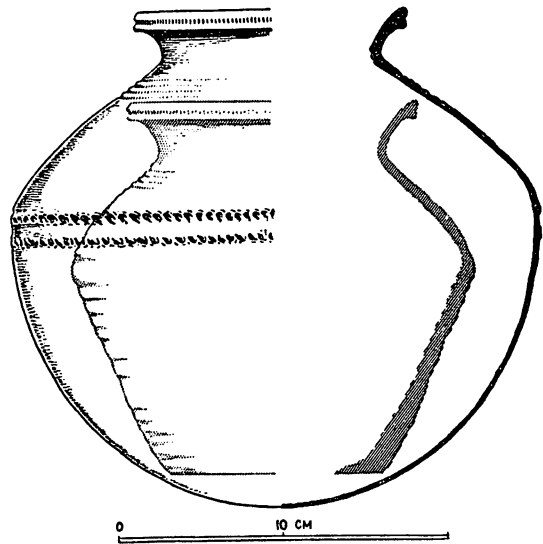
でも底面の叩き締め作業が可能であったのか。この点について、筆者はいささかの不安を感じている。あるいは筆者の観察や考え方に誤りがあるかもしれないが、一応、見たまま考えたままを述べておく。

おわりに

冒頭にも記したように、この論文は、須惠器の叩き目の器面におけるあり方を、製作過程と関係させながら理解しようと試みたものである。最初の試みであるので、大筋を示す程度にとどまったが、このような技法分析をさらに深めてゆけば、従来の方法ではとり出せなかった時代的・地域的特徴を明らかにできるのではないかと考えている。

本稿で筆者が最も強調したかったのは、須惠器の丸底の壺甕は、原則として、一たん平底に成形され、のちの工程で丸底に叩き上げられること、例外として、大型の甕は最初から丸底の形で成形されることである。この製作の手順を念頭に置かないと、器面における叩き目のあり方を正しく読み取ることができない。

一たん平底に作ったものを丸底に叩き上げるということは奇異に感じられるかもしれないが、世界各地に現存する伝統的な土器製作法を参照すれば、決して例外的な製作法でないことがわかる。叩き締めの工程における土器の変形は想像以上のものであって、第一次成形品と全く違った形に叩き上げられることがある。はなはだしい場合は、底の無い円筒形の粗型を叩いて丸底の土器を作りあげる。たとえばインドでおこなわれている伝統的な土器製作法⁽²³⁾では、まず轆轤の回転力を利用して底の無い第一次成形品(第8図内側)を挽き出し、これを轆轤からはずして暫時乾燥したのち叩き締めをおこなう。叩き締めの工程で底の孔はしだいに縮小してふさがれてしまい、ふっくらとした胴の丸底の器形(第8図外側)ができ上がる。完成品の上に第一次成形品の面影が残っているのは口頸部だけであって、その他の部分は似ても似つかぬ形に変わってしまう。完成品だけを見れば、これが無底の粗型から叩き出されたとは、誰も想像できないような変り方である。インドの例では第一次成形を轆轤水挽きでおこなうが、中国雲南省に住む傣族は粘



第9図 叩き締めの効果 内側—第1次成形品 外側—完成品 (Dumont 氏報告より)

土帯積み上げの技法で底の無い円筒形の粗型を作り、これを叩いて丸底の土器に仕上げる⁽²³⁾。筆者は一時、日本の須恵器の壺甕も底の無い粗型から叩き出されたのではないかと疑ったことがある。しかし、須恵器の場合は、第一次成形の際に底部と側壁の境目であったと推定されるあたりに粘土を接合した痕跡が残っていることがあるので、第一次成形品にも底があったと見るべきである。

須恵器のように、一たん平底に作ったものを丸底に叩き上げる技法は、やはり中国雲南省の傣族がおこなっている伝統的な土器製作法のなかに見られる⁽²⁴⁾。この場合は、まず原始的な轆轤の盤上で、粘土帯積み上げの技法によって円筒形平底の粗型を作り、口縁部のみは轆轤の回転力を利用して仕上げる。ついで、轆轤の盤上で円筒形の粗型の側面を叩き、ふくらみのある腹部を作り上げたのち(第9図a)、土器を轆轤からはずして乾燥させ、半乾きの時に底を叩いて平底を丸底とする(第9図b)。この工程は、細部に相違はあるものの、基本的には先に筆者が日本の須恵器について推定した工程と同じである。

叩き目のあり方から見ると、朝鮮三国時代の陶質土器も須恵器と同様な工程をとったと考えられる。一例をあげる。第10図は長崎県対馬大將軍山石棺墓出土の百済系とされている短頸双耳壺の叩き目である⁽²⁵⁾。この壺は胴部側面に縄蓆文叩き目を右上りの斜め縦位に押し、その上に篋描きの平行線文をめぐらす。この篋描き文は器面に時計廻りの



a



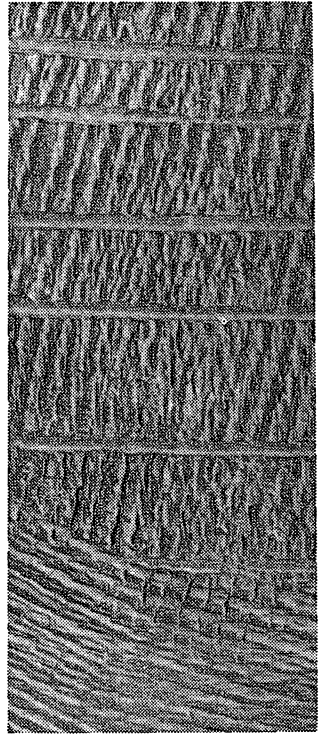
b

第9図 中国雲南省傣族の土器製作状況（張季氏報告より）

螺旋状にえがかれていて、篋描き施文までの工程が回転台あるいは轆轤の上でなされたことを示している。底面は数方向から叩き締め、底面叩き目は側面叩き目と篋描きの線をおしつぶしている。これ等すべての特徴は、日本の須恵器の叩き目の器面におけるあり方と全く同じである。須恵器の底面叩き出しの技法は、直接には朝鮮から伝来したものであることが了解されるであろう。

しかしながら、朝鮮の陶質土器は、丸底の形をとるものでもいくぶん平底の趣を残し、安定がよい。なかには上げ底風のものもある。⁽²⁶⁾これにくらべると、日本の古墳時代須恵器は完全な丸底のものが多く、安定が悪い。轆轤あるいは平らな台の上で第一次成形をおこなうと、当然平底の粗型ができ、その底を叩き締めると底面が張り出してくることは避け難い⁽²⁷⁾が、必ずしも日本の須恵器のような完全な丸底に仕上げる必要はない。須恵器の壺甕の底が特に丸味を帯びているのは、須恵器製作技術の日本化の過程でおこった現象であり、日本人による選択の結果である。おそらく、須恵器伝来当時の日本人が、丸底の土師器を使い慣れていたことと関係があるのであろう。

本稿を草するに当っては、多くの方々から助言をいただき、また資料の調査について援助を得た。特にお世話になった方を記す



第10図 百済系土器の叩き目
対馬大将軍山
(東京国立博蔵)

と、岩瀬清信、岡内三眞、岡崎敬、小田富士雄、近藤義郎、佐田茂、佐原眞、高島忠平、巽淳一郎、田辺昭三、檜崎彰一、西田直、西谷正、東中川忠美、松本豊胤、三島格、村井富雄、本村豪章、森田勉、柳田康雄、弓場紀知、吉田恵二、渡辺正気の諸氏である。陶芸

家金子認氏には叩き技法の実演をお願いしたうえ、執拗な質問に快く答えていただいた。最後に、資料の閲覧や写真の掲載に便宜をはかっていただいた東京国立博物館、京都大学文学部博物館、京都市埋蔵文化財研究所、奈良国立文化財研究所、岡山大学考古学研究室、九州歴史資料館、福岡市立歴史資料館、北九州市立歴史博物館、北九州市埋蔵文化財調査室、兵庫県、香川県、愛媛県、福岡県、福岡市、久留米市、佐賀県、熊本県の各教育委員会、大阪府東奈良遺跡調査会、ならびに講談社に謝意を表する。

〔付記〕 本論文は昭和五十四年度文部省科学研究費（一般・B）による「刷毛目技法を中心とした土器製作技術史の再検討」の成果である。

〔註〕

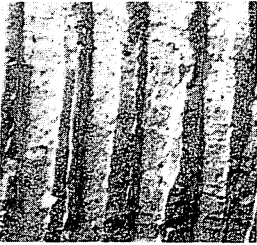
- (1) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I（『研究論集』第一〇号 平安学園教育研究会 一九六六）、中村浩ほか『陶邑』I・II・III（『大阪府文化財調査報告書』第二八・二九・三〇輯 一九七六・七八・七八）。

- (2) 弥生式土器・古式土師器については、都出比呂志「古埴出現前夜の集団関係」『考古学研究』第二〇巻第四号 一九七四) 関川尚功「畿内地方の古式土師器」(石野博信・関川尚功『纏向』桜井市教委 一九七六)。瓦については、原口正三・佐原真「瓦類」(『船橋遺跡の遺物の研究』平安学園考古クラブ 一九五七)、佐原真「平瓦桶巻作り」(『考古学雑誌』第五八巻第二号 一九七二)など。
- (3) 瞭のような小型の壺のなかには、外底面に掌を当て、胴の開口部から棒状の道具をさこんで底を叩き締めたと考えられるものがある。この場合には、道具は一つでよい。
- (4) 金子認氏の直接の教示による。
- (5) 楢崎彰一氏の教示による。発掘調査の出土品としては、岐阜市老洞一号窯出土品(『老洞古窯群発掘調査概報』岐阜市教委 一九七八)等がある。いずれも葎形。採集品としては、以前から小川栄一氏収集品が知られているが、そのほかに古美術市場に流出したものが数個ある。ほとんどが葎形品で、石鹼形品は小川氏収集品中に二例あるのみである。
なお、福岡県宮の前遺跡発見の葎形土製品(『宮の前遺跡(A-D地点)』福岡県労住協 一九七一 三三頁以下 第五図)を弥生式土器用の当て具と見る高倉洋彰氏等の意見は従うべきである。弥生式土器・土師器を出す福岡県東郷遺跡の報告(『東郷遺跡群』日本住宅公団 一九六七 第六三図)に、格子状文を刻する葎形当て具らしいものが図示されていることを西谷正氏の教示で知ったが、本文にこれに関する記述がないので詳細は不明。
- (6) 一九七八年、愛媛県調査。調査担当者である長井数秋氏等のご好意により実見できた。
- (7) 東奈良遺跡調査会調査。
- (8) 原口正三・佐原真「瓦類」(『船橋遺跡の遺物の研究』平安学園考古クラブ 一九五七)、田辺昭三「陶邑古窯址群」I『研究論集』第一〇号 平安学園教育研究会 一九六六)三九頁以下など。
- (9) 中国明代の『天工開物』に、大甕は上下に二分割して成形し、「木槌」で叩いて接合すると記す。現行刊本挿図には柄を別木とした丁字形の金槌様の槌をえがくが、これがどこまで真を伝えているのであろうか。Hommel, Rudolf P. "China at Work" 1937, Fig. 518 にのせる大甕製作の叩き具は「叩き板というより「槌」であるが、横槌の類に属し一木作りである。
- (10) 『池の上埴墓群』(『甘木市文化財調査報告書』第五集 一九七九)第一二九図。
- (11) 一九七九年、兵庫県教委調査。土器については発掘担当者大村敬通氏の教示による。

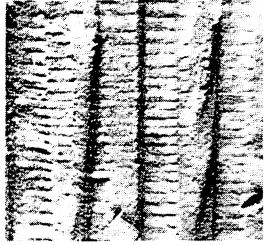
- (12) 側面に横位平行線叩き目を印する須恵器は、福岡県木塚遺跡出土品〔「木塚遺跡」(「久留米市文化財調査報告書」第一四集 一九七七) 第一七四二〕、香川県喜兵衛島七号墳出土品〔喜兵衛島調査団「謎の師楽式」(「歴史評論」七二号 一九五六) 第一一四二〕など、古墳時代終末期以前にも例がないわけではないが、少数である。北部九州では、福岡県白萩横穴群出土品〔「白萩横穴群」(「北九州市文化財調査報告書」第三二集 一九七九) 第一三〇四七・四八〕、同県池田横穴群第一七号横穴群前庭出土品〔「池田横穴群」飯塚市教委 一九七八 第三三〇〕、同県大行事横穴群出土品〔「大行事横穴群」(「大任町文化財調査報告書」第三集 一九七九) 第三六四一〇八〕など、古墳時代終末期以降の遺跡の出土品に例が多い。この種の土器を特に数多く出しているのは福岡県沖ノ島祭祀遺跡〔沖ノ島第三次調査隊「宗像沖ノ島」宗像大社復興期成会 一九七九〕である。同遺跡出土の叩き目のある須恵器は、ほとんど横位平行線叩き目を印する。また、同種土器の窯跡は福岡県宗像町にあるという〔前掲「宗像沖ノ島」四四九〜四五〇頁〕。横位平行線叩き目を印する須恵器は、地域によって出現頻度に差があり、現在のところ、北部九州以外の地では出土例が少ない。平城京では、左京一条三坊の溝(SD四八五)から出土した和銅の紀年墨書を有する広口甕〔「平城宮発掘調査報告」VI (「奈良国立文化財研究所学報」第二三冊 一九七四) 図版六五—一に墨書部分のみ写真掲載〕が現在のところ初出であるが、類例は少ない。田辺昭三氏によると、平安京でも皆無ではないが、きわめて少数。大阪府陶邑窯跡群では、操業の全期間にわたりこの種の叩き目を印する土器を生産していない。ただし、平安時代末期以降に各地で作られた須恵器系の焼物には横位平行線叩き目が目立つ。横位平行線叩き目の消長については、本稿の主題からやや離れるので、さらに調査を進めて、別稿において詳述したい。
- (13) この点については観察が不十分であるので、確言を避けたい。
- (14) 中山平次郎氏が「祝部式弥生式土器」と仮称した土器である。同氏「祝部式の圧痕を示せる弥生式土器」(「考古学」第五卷第七号 一九三四) 参照。沖ノ島出土品については、沖ノ島第一次調査隊「沖ノ島」宗像大社復興期成会 一九五八 二二〇頁以下の記述、同第三次調査隊「宗像沖ノ島」同上期成会 一九七九 巻頭原色図版IX、図版八四—一〜三などを見よ。類似の土器は、最近、福岡県下の古墳、海岸遺跡等からの出土例が増えつつあり、なかには、製塩土器と推定されるものも含まれている。
- (15) 註2にかかげた瓦に関する論文。
- (16) 佐原真氏は、註2にかかげた瓦に関する論文で、製瓦用の回転台ないし轆轤は、工人の体に対して比較的高い位置にあったと推定している。

- (17) 註11に同じ。
- (18) たとえば福岡県沖ノ島五号遺跡出土甕（沖ノ島三次調査隊『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会 一九七九 図版八六）、平城宮主馬寮井戸（SE六一六六）出土甕。
- (19) 『小田茶臼塚古墳』（『甘木市文化財調査報告』第四集 一九七九）図版三二一四、第三〇図。
- (20) 大型甕にも胴部の側面叩き目と、底面叩き目との区別がある。大型甕の底を叩き締める際には、土器を裏返しまたは横倒しとし、側面を叩き締める際には、土器を正立させて作業をおこなったと推定する。
- (21) 一九七八年、佐賀県教委調査。
- (22) Dumont, L. "A Remarkable Feature of South Indian Pot-making." *Man*, 1952, 121. およびこの報文に対する Ghosh, A. の Correspondence, *Man*, 1953, 70.
- (23) 林声「雲南傣族制陶術調査」（『考古』一九六五年 第二期）
- (24) 張李「西双版纳傣族的制陶技術」（『考古』一九五七 第九期）。なお、李仰松「雲南省瓦族製陶概況」（『考古通訊』一九五八 第二期）は、上面が凹んだ原始的な台を使う叩き技法を紹介している。この場合も、側面叩き締めは底面叩き締めに先行する。
- (25) 駒井和愛・増田精一・中川成夫・曾野寿彦「考古学から見た対馬」（『対馬の自然と文化』一九五四）、小田富士雄「西日本発見の百済系土器」（『古文化談叢』第五集 一九七八）。
- (26) 金子認氏の実演から推測すると、底面の中央よりもその周囲を強く叩き締めれば、上底風になる。
- (27) 土器の底面を叩き締め、しかも平底に仕上げるには、底となるべき粘土板を最初に板あるいは轆轤の上で叩いておき、その上に土器の側壁を積み上げればよい。この手法は現在の朝鮮や日本の伝統的陶芸家の間にも伝承されている。この手法でつくられた土器は底部外面に叩き目を残さない。ところが、熊本県北浦A窯出土の瓶（坂本経堯「小代山麓古窯址群調査報告」（坂本『肥後上代文化の研究』一九七九）第六図）のように、平底でありながら底部外面に叩き目を残す須恵器の一群がある。その製作手順の詳細は今後検討の要がある。

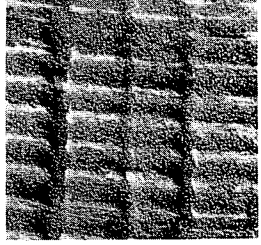
図版第一 叩き目細部



1



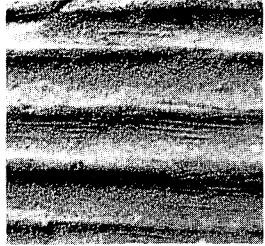
2



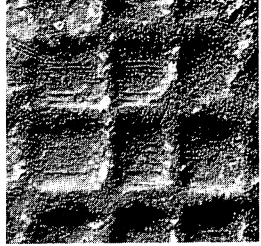
3



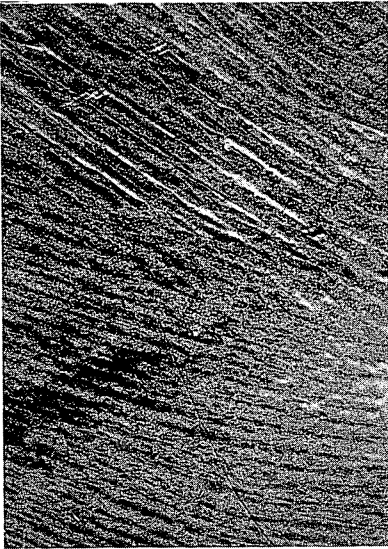
4



5



6



7

外面



内面

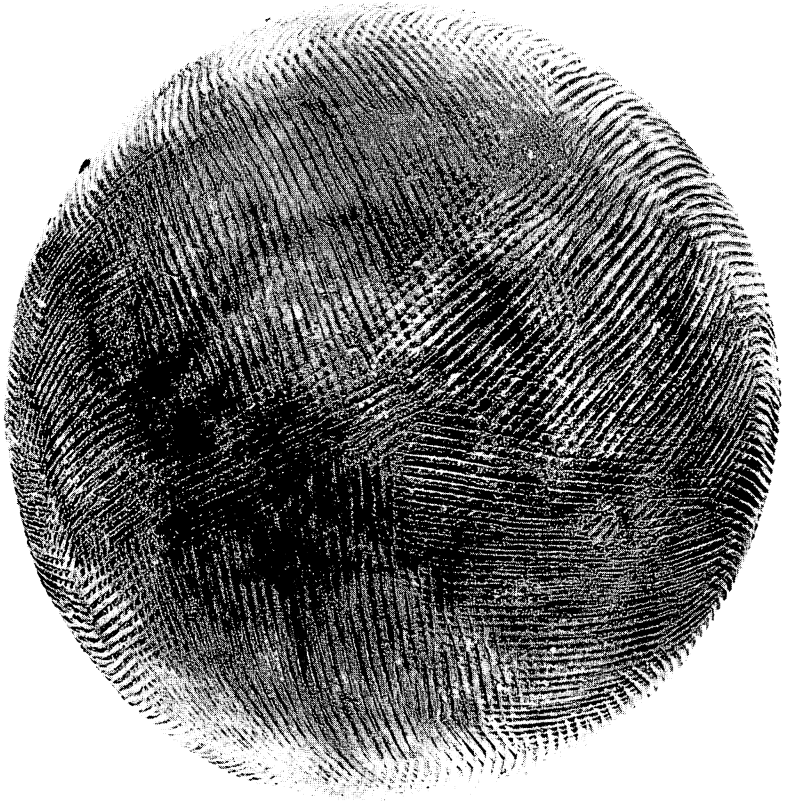
図版第二 甕の側面叩き目



(上) 縦位平行線叩き目 香川・権八原古墳
(香川県教委保管)
(下左) 横位平行線叩き目 平城京(奈文研保管)
(下右) 格子状叱き目 平安京(京都市埋文研保管)



図版第三 壺の底面叩き目



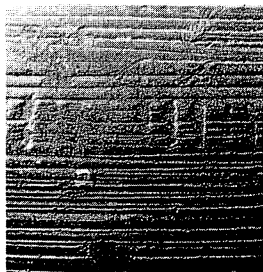
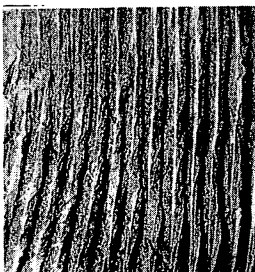
香川・綾歌町(東京国立博物館蔵)

図版第四 叩き目と刷毛目の重複関係

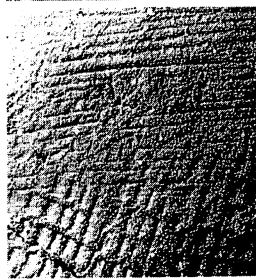
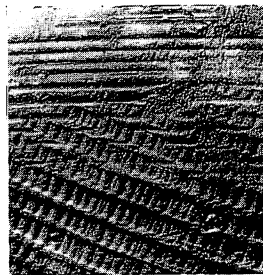
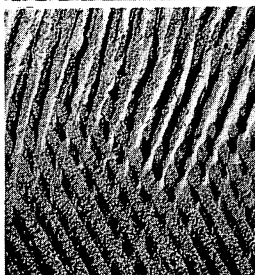
〔全形〕



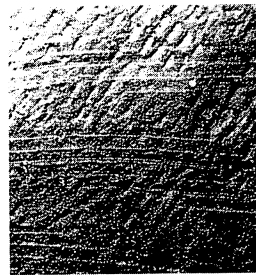
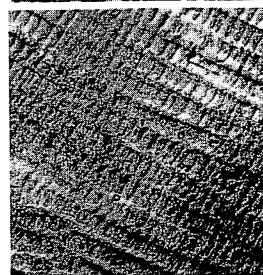
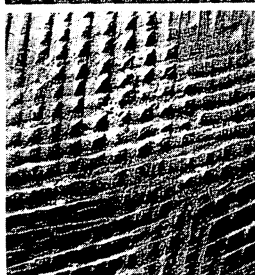
〔胴上部〕



〔底面叩き目上限〕



〔底部〕



1 香川・綾歌町
(東京国立博蔵)

2 福岡・番塚古墳
(九大文学部保管)

3 福岡・小戸古墳
(九大文学部保管)

図版第五 大甕の叩き目

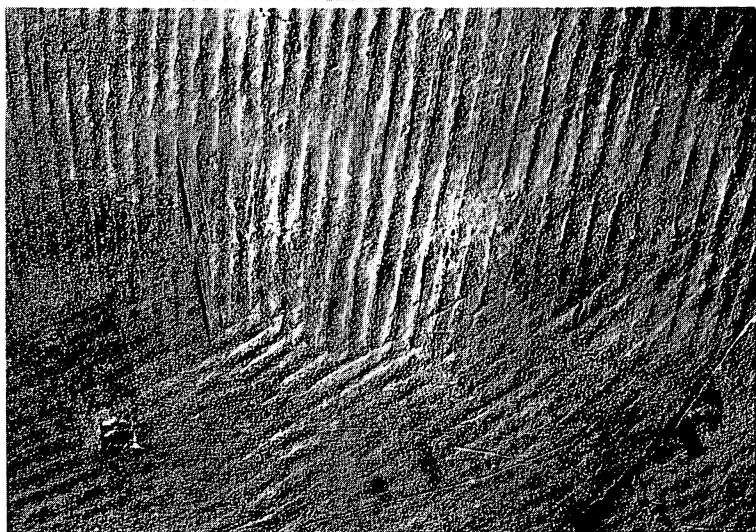


(下) (上)

大甕の全形

側面叩き目と底面叩き目の

重複部分



福岡・小田茶白山古墳(福岡県教委保管)